鶏足山から富士山

12月30日、晴天、朝7時集合、一行7名、私が昨年年始めに念願していた、鶏足山（430m）に登り富士山を見ました。

寝起きで、足元の覚つかない中、木の葉で足を辷らせながら登りました。途中、富士山が見えるという地点で皆で富士山を探しましたが、やや空気が沈んでいて見えず「今日は残念だね」の声が出て、頂上に向かいました。駐車場所から約30分で、頂上に着きました。

山頂から東を見ると、太平洋が黄金色に輝いて見えましたが、林が視界を遮っているので、尾根を少し北に歩くと、そこからは、東は水戸から大洗方面、西は宇都宮の市街が広がって、遠く、日光、那須塩原の連山、北は奥久慈から阿武隈の山並みが望めて、眺望が四方に開けています。

わが城里町は、山は冬枯れてはいますが、常緑樹の緑の山あいに、人家の点在が見られ、山の波に包まれて、自然と一体化した地域に見えました。

風が少し出て日光連山にかかっていた雲も少し薄くなってきた頃、山を下り始めました。途中「あっ！富士山が見える」と先頭が指差す方向を見ると、東側稜線が朝日に光る富士山の姿が遥かに見えて、「今日は富士山が見られてよかった」と皆で喜び合いました。

私たちの身の回りを探すと、普段気にとめていない風景や動植物を始め、農産物等にも資源として生かせるものが沢山あると思います。このような地域資源を、観光に、また農業や商業に生かしていくことが大切ではないかと思います。

文芸しろさと

俳句

潮満ちて河口公園春待てり　飯田　勇一

霜よけのシートを上げて息白し　山崎　正行

給食車ぬくもり運ぶ年の暮　いそべ　きよ

週末や袖子と砂糖を母に買ふ　竹内　幸子

貼り立ての障子のすべりなめらかに　田所　厚子

冬の鵯枝移る時影太し　仲田　まちゑ

雪催煮豆の湯気のたちこめし　和田　範子

雪原に鹿の足跡Z文字　今瀬　多代美

手渡しで受ける喪はがき冬椿　飯村　昭子

今朝も掃く落葉昨日と同じ嵩　阿久津　あい子

園児等の手に持つ小旗落葉道　森　静江

杵の音米のとぎ汁凍て流る　高橋　芦江

廃校の砂場枯葉の吹き溜り　鯉渕　寿美恵

日溜りに四、五軒の家山眠る　瀬谷　博子

老夫婦暮れの役割こんぶ巻き　岩下　金司

ほろるの湯花壇に目入り霜柱　富田　欽子

きのうより今日は長閑し蘭の花　田口　勝元

盆栽のカレンダ楽し花の園　市川　義子

ふる里の庭なつかしき「秋明菊」は母在りし日のごと紅深し　青柳　京子

老いなれば鏡を見ようかうかとモダンな服をうらがえし着て　山形　式妙

夜の更けて雨の音のみ聞こえくる喪中のハガキ書きゐる部屋に　渡辺　千紗子

あらゆるものを巻き込める竜巻きは一分間とふ北の佐呂間町を旅にて遇きて　秋山　愛子

群青の下に燃ゆ果つ紅葉は朱色に重なりて人を酔わしむ　大森　久子

「国会の答弁以上に緊張した」と言ふ総理始球式のマウンドに立ちて　高堀　よしの

唱ふれば心の雲も去りゆきて今宵も学ぶ追善和讃　佐川　あや

後手に腰を曲げつつ前を行く園児男孫は婆の真似して　杉山　みちこ

秋深し寺庭のもみじ観音み姿つつみ夕陽に輝れり　宮本　ふみ江

除夜の鐘十九年が明け初める心新に新春を祝う　仲田　こう

前山の峰より初日昇りくる黄金色にと空輝きて　岩下　通子

裏山に木の葉さらへば思い出すかごにつめくれし優しい母を　鶴田　すが

春間近寒い冬日はもう終わりがんばって八十路の道を進み行く　岩下　美知野

初詣で稲荷神社の境内で拍手打ちて無事を祈らん　阿良山　ウメノ

横綱を放ふる出島の技の冴えその一瞬をゆゆしと見たり　山口　栄

緑濃き小松菜群れて雑草に負けぬ強さをわがものとせむ　薄井　ひろ

新しき百貨店内おしゃれなり異邦人のごとうろうろ見歩む　枝不　美

安らぎのふくらむ像か句稿練る夫の背の丸み愛しも　片見　和枝

沈む陽に煌く海の沖を行く純白の船絵のごとく見ゆ　川上　千代子

五十里湖の水面に映ゆる山々の赤黄の紅葉残照に燃ゆ　島　愛子

弱りたる視力に夕べの灯を早むそこに知人の訃報のりをり　多田　志保子

弟の病みて二年経しこの現実老いたる吾に肩の荷重し　坪井　きよ子

うかららの声の聞こゆる思いにて明日解体の廃屋に佇つ　萩谷　登喜子

夕暮れてひとりもいない公園にすべり台を一人占めした銀杏の葉　和知　美智子

散りかかるくれなゐの紅葉肩に受く滝への石畳歩みて行けば　冨田　佐智子

短歌

雲つかむごとくに勢ひ伸び出づる大懸崖は王者のごとし　所　美恵子

川柳

初春や三日坊主の願をかけ　富田多蔵

子作りも出来ぬ亭主は蚊帳の外　青木新三郎

病院の待合室でクラス会　山本　隆荘

足代わり白寿が車乗り回わす　中島　芳春

訂正

広報しろさと1月号16頁、高堀よしのさんの短歌にある、「安部総理」は「安倍総理」の誤りでした。お詫びして訂正します。